

産業臨床心理学特論の意義に関する一考察

新 田 泰 生*

A Study on Meaning of the Special Lecture in Industrial Clinical Psychology

Yasuo NITTA*

【要 約】

本研究の目的は、大学院臨床心理士養成課程の産業臨床心理学特論の受講者 11 名のレポートの中から、この授業の意義を典型的に表していると思われるレポートを 2 事例抽出し、それを分析・考察することで、この授業の意義を明らかにすることである。その分析と考察により、方法的な限界がありながらではあるが、「実感にもとづき自分の体験を基礎とする姿勢」は産業心理臨床においても基本である可能性と、受講により院生の「産業心理臨床へのハードルの高さ、企業組織への関わりの負担感が少し減少」する可能性が示唆された。より良い臨床心理士養成を考える時、実践的授業研究は今後必須のものといえる。今回の研究は、方法的にはラフなものではあるが、その第一歩と考えておきたい。

I はじめに

日本臨床心理士会が 2007 年に行った「第 5 回 臨床心理士の動向ならびに意識調査」によれば、大学・研究所を含めた「教育・学校」領域で働く臨床心理士が一番多く、41.1%、次いで、「保健・医療」28.3%、「福祉」12.3%、「司法・矯正」「開業」が各々 3.7% であり、「労働・産業」領域で働いている臨床心理士は 2.2% であった。この結果を見ても、臨床心理士全体の中で、「労働・産業」領域で働いている臨床心理士は、最も少数派であることがわかる。この傾向は、臨床心理士を養成する大学院の院生においても同様であることが推測され、将来スクールカウンセラーや病院臨床を志望する院生が多数を占めるのに比べて、産業臨床を志望する院生はごく少数である。院生にとっては、なじみのある学校や病院の現場と比べて、企業という現場は、よくわからない、異質で、遠いものとして感じられているかもしれない。また相談室内でのカウンセリングだけでなく、企業組織全体への関わりを強く求められるということも、産業心理臨床の敷居を高く感じさせていることに繋がるのかもしれない。これらは、日頃院生との関わりの中で、筆者が感じてきたことでもある。いずれにせよ、筆者は、臨床心理士養成教育に携わる中で、担当している臨床心理学特論、臨床心

* 神奈川大学人間科学部 (Faculty of Human Sciences, Kanarawa University)

面接特論等の必修科目と比べて、産業臨床心理学特論の場合は、院生にとってそれがどのように認知されているのかを特に配慮しながら実施してきた。そのような問題意識の中で、筆者が非常勤講師として集中講義で実施した A 大学における産業臨床心理学特論において、この問題意識に関係すると思われる興味深い結果が得られたので、ここに報告することにした。

従って本研究の目的は、大学院臨床心理士養成課程の産業臨床心理学特論の受講者 11 名のレポートの中から、この授業の意義を典型的に表していると思われるレポートを 2 事例抽出し、それを分析・考察することで、この授業の意義を明らかにすることである。

II 研究の方法

1 産業臨床心理学特論の構造

(1) 授業の目的と概要

産業臨床心理学特論は、臨床心理士が産業領域で心理臨床活動を行うに際しての理論と実践を、体験学習を中心に学習することを目的とする。カウンセリングやアセスメントの臨床心理学を中核としながらも、産業領域においては、同時に職場集団や会社組織に関わる産業・組織心理学や社会学、経済学等が必要とされる。自発的な問題意識の探求と、集団に関わる感性を養い、グループ・ダイナミックスを理解するために、少人数のディスカッションやグループ・ワーク等の方法を積極的に導入する。

(2) 授業の形式

筆者が非常勤講師として出講している A 大学大学院臨床心理士養成課程修士課程 1 年生に、後期の 3 日間の集中講義として実施された。

(3) 授業の受講生

A 大学大学院修士課程 1 年生 11 名（女性 11 名、その内職業経験者院生 4 名、現役院生 7 名）

(4) 授業の進め方

集中講義の前に論文を送り、事前に読んできて、授業時に話し合う形にした。

①授業開始前に事前に論文を読んでもくる。②授業開始後、各自、論文の中で、自分の印象に残ったところ、話し合ってみたいところ、疑問に思ったところなどの確認を行う。約 5 分程度。③ 2 人で組んで、論文について、相互に語り合う。約 5 分程度。④各グループ 3～4 人、計 3 グループで論文について話し合う。講師は、随時各グループに入り話し合いに参加する。約 45 分程度。⑤各グループのレポーターが話し合いのポイントを全体にレポートする。講師は各グループのレポート毎にコメントをしていく。約 20 分程度。⑥各自その回の授業に対する記名入りのアンケートを記入する。約 10 分程度。

(5) 授業のカリキュラム

集中講義 3 日間で 13 回の授業を、以下のタイトルの論文を題材として実施した。

1 日目

1 限 8:50～10:20 「産業領域における活動モデル」

- 2 限 10:30~12:00 「職場のメンタルヘルス、最近の傾向と対策」
3 限 12:50~14:20 「企業サイドからみた臨床心理学および組織心理学への要請課題」
4 限 14:30~16:00 「リーマン・ショック後のリストラ失業の語りを聴く」
5 限 16:10~17:40 「産業臨床心理学における物語論の視点からみたワークライフバランス」

振り返り 17:40~18:00 1日目全体に関するアンケート記入

2 日目

- 1 限 8:50~10:20 「教育研修を中心とした企業相談室の開設とその後の運営」
2 限 10:30~12:00 「企業内における従業員援助プログラム」
3 限 12:50~14:20 「資本主義はなぜ自壊したか——日本再生への提案——」
4 限 14:30~16:00 「経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか」
5 限 16:10~17:40 「ワーク・ライフ・バランスの経営学」

振り返り 17:40~18:00 2日目全体に関するアンケート記入

3 日目

- 1 限 8:50~10:20 「スローに生きる」
2 限 10:30~12:00 「マインドフルネス認知療法の開発」
3 限 12:50~14:20 「臨床心理士の産業領域における臨床心理実践について」

振り返り 14:30~15:00 3日目全体と授業全体に関するアンケート記入

2 研究の手続き

授業の始めに、レポート、アンケート等を研究の資料として使用することの承諾を求めた。授業終了後にレポート（1600字前後）の提出を求めた。11名のレポートの中から、受講生が感じたこの授業の意義を典型的に表現していると思われる2事例を選択した。選択の基準はおおよそではあるが以下の通りである。①受講生が感じたこの授業の意義を豊かに記述しているもの。②記述内容がその個人の特性によって偏り過ぎていないもの。③記述内容が受講生の意義への認知をおおよそ代表しているとみなせるもの。

2事例の文章データのそれぞれを、分析する内容のまとまりにより切り離した。一つずつ結果として記述すると共に、そのデータを分析し考察を加えた。2事例を前述のように分析・考察した後に、総合的にこの授業の意義に関して考察を加えた。

III 研究の結果と考察

1 事例Aのレポートの結果と考察

(1) A-1の結果

今回、産業心理に対するイメージが大きく変化した。これまで、産業領域とは社会で働く人が対象であると考えていたが、授業を通じて、働く人のみならず全ての人が対象であり、各々個人の在り方、家族の在り方、コミュニティや企業組織の在り方等が凝縮され、社会の縮図として顕れてくる領域であると感じた。

(2) A—1 の考察

これは特別で異質な領域とみなしていた産業心理臨床のイメージが変化したということであろうか。あるいは産業領域と他領域との共通性が認識できたとも理解できようか。根本から見れば、「働く人のみならず全ての人が対象であり」、それはむしろいろいろなものの「在り方等が凝縮され、社会の縮図として顕れてくる領域であると感じた」、つまり社会の縮図として根本を扱っている共通性があるとも言いうるのである。

(3) A—2 の結果

授業の中では、グループディスカッションを行い、各々、自分の体験や感じたことなどを言語化しながら共有していくことを繰り返し行った。その中で、常にかけていたことは、自分の視点の狭さや偏りであった。一方で、その狭さや偏りを、自分の体験として大切にすることが重要ではないかということも、ディスカッションを重ねていく過程で感じるようになった。また、主観的・客観的といった言葉に縛られて、自分で自分の枠を決めていたことにも気づくようになった。まずは、自分が自由になり楽になるという体験やその過程こそが、自分の依って立つところであり、そのようにして学び取ったことが、唯一の自分の真実なのだということを、今回の授業を通じて実感を伴って理解できた。

(4) A—2 の考察

Aさんは、「常にかけていた」「自分の視点の狭さや偏り」を、「ディスカッションを重ねていく過程で」むしろ「自分の体験として大切にすることが重要ではないかということも」感じるようになる。それが自分の視点の狭さや偏りであるとしても、それを否定的に否認しては、自身のそれとつきあっていくことはできない。むしろ狭さや偏りを「自分の体験として大切にすること」から自身の体験としてそれを受けとめつつ、そのままに語ることで、それと相互作用できるようになっていく。例えば、話し合いの中で、筆者から、「あなたが気にしている正しい答というものについて教えてください」、「客観的な答って何でしょうか？」などと問われる。話し合う内に、『客観的な見方、考え方をしなければならない』、『主観的な見方、考え方は間違っている』などという「言葉に縛られて」いたことに気づくようになる。客観的・主観的という言葉により、「自分で自分の枠を決めて」しまい、自分の実感に基づく体験を、抑圧していたことにも気づくようになる。

そしてグループディスカッションを重ねていく過程で、そのような体験過程を通じ、「まずは、自分が自由になり楽になるという体験やその過程こそが、自分の依って立つところであり、そのようにして学び取ったことが、唯一の自分の真実なのだということを、今回の授業を通じて実感を伴って理解できた」のである。

(5) A—3 の結果

知識や事実を知ることと、自分のものとして学び得ることの違いは大きい。授業の中でも、文献を読み進めることは簡単であったが、それを実感として理解するためには練習や訓練を重ねていく過程が必要であるということに気づかされた。

(6) A—3 の考察

自分の実感にもとづく体験に気づくことは、文献・論文の読み方をも変化させる。単に「知識や事実を知ること」と、自分の実感に落とし込んで「自分のものとして学び得る

ということ」との違いは大きい。単に事実を知る形で「文献を読み進めることは簡単であったが、それを実感として理解するためには練習や訓練を重ねていく過程が必要であるということに気づかされた」と述べている。

(7) A-4の結果

そのようにして、自分が、自分自身の心や体験と真摯に向き合い続ける姿勢や態度が、産業領域において幅広く多様な背景を持つ、対象者及び対象組織との真の信頼関係を築くためにも欠かせないと思う。さらにそれは、そのまま現在の自分が置かれている環境に当てはめることができる。産業心理は全ての人が対象となるということは、院生同士や上級生、指導教官、実習で向かい合うクライアント、さらには、自分の家族や友人等、あらゆる場面における対人関係を体験し振り返ることは、そのまま臨床の訓練となるということである。今回の授業の中だけでも、現役生と社会人経験者が混在しており、そのような中で世代間のギャップや同世代間での共通点、さらに地域性の違いや職種による違い、職場・学校環境の影響など、多様なものを感じることができた。そのため、普段のコミュニケーションから学ぶことは多いということを実感した。

(8) A-4の考察

「自分自身の心や体験と真摯に向き合い続ける姿勢や態度」が、「産業領域において幅広く多様な背景を持つ、対象者及び対象組織との真の信頼関係を築くためにも欠かせないと思う」と、この姿勢や態度が、複雑で困難な産業領域に参入するために必要であると述べている。しかし『自分の体験と向き合い続ける姿勢や態度』は、産業に限ったものではなく、臨床心理士の基本的な態度と思われる。Aさんはこの態度を「現在の自分が置かれている環境に当てはめ」、「あらゆる場面における対人関係を体験し振り返ることは、そのまま臨床の訓練となると」述べる。そして今回の授業の中でも世代間のギャップなど多様性のもたらす「コミュニケーションから学ぶことは多いということ」に気づいている。授業でのグループディスカッションが、そのまま実践の学びの場となっていたことが伺われる。

(9) A-5の結果

特にネガティブな感情を喚起される場面においての自分の心や体験や態度の在り方を見つけることは、視点を変えれば、大変興味深いチャンスとなる。そのようなことに気づき、臨床心理を学ぶということは、単に学問を学ぶという枠を超え、人間としての楽しみを自分で見つけていく手段を学ぶこととも言えると感じるようになった。これまでのように、自分の視点の狭さや偏りをネガティブに捉え、それを変えようとするのではなく、その視点の狭さをそのまま自覚することや、全ての物事においてはその光と影の部分があることに気付くことが大事であると気づき、今回の授業で、まさに自分自身が楽になる体験ができた。

(10) A-5の考察

前にも述べているが、「自分の視点の狭さや偏りをネガティブに捉え」、それに伴いともすればそうなりがちなのであるが、「それを変えようとするのではなく」て、むしろそれをそのままアクセプトし「その視点の狭さをそのまま自覚すること」の大切さについて述べている。このような姿勢は、「特にネガティブな感情を喚起される場面においての自分の心や体験や態度の在り方を見つけることは、視点を変えれば、大変興味深いチャンスとなる」と気

づき、「臨床心理を学ぶということは、単に学問を学ぶという枠を超え、人間としての楽しみを自分で見つけていく手段を学ぶこととも言える」と感じている。以上のことから、「今回の授業で、まさに自分自身が楽になる体験ができた」と述べている。

(11) A—6 の結果

臨床心理という世界についても同様に、その狭さや偏りがあるのではないかと思う。産業領域においては、成果主義の流れによって、能率や効率、スピードが重視される中で、言語化や可視化が難しく長期的な関わりが必要である臨床心理士の専門性や独自性を受け入れてもらうことは、例えば、転校や転職などによって、新しい環境に自分を受け入れてもらうというときと似ていると思う。その難しさは、産業領域で活躍する臨床心理士の割合が低いことにも反映しているのではないかと思う。しかし一方で、そのような難しい領域だからこそ、臨床心理士が大切にしているものを核として持ち続けながらも、その組織や個人を尊重し大切にし、尚且つそこに巻き込まれずに、働きかけていくことが求められ、それは、臨床心理士が最も得意として楽しめる分野でもあると思う。他者を尊重し大切にすることとは、自分を押し殺すのではなく、まずは、自分を尊重し大切にすることから生まれてくる感情であり感覚であるということから、自分と臨床心理との関係についても興味深い共通点があることに気付くことができた。

(12) A—6 の考察

成果主義、能率や効率が重視される産業に比べて、臨床心理士の専門性は、「言語化や可視化が難しく長期的な関わりが必要である」ために、その理解され難さがある。Aさんは、その難しさを転校や転職に喩えたり、産業領域の臨床心理士の割合の低さに言及することではっきりと認識していることを表している。しかしそれにも拘らず、産業領域に関わる必要性についても述べている。そこで注目したいのは、「臨床心理士が大切にしているものを核として持ち続けながら」働きかけていき、そこで「その組織や個人を尊重し大切にし、尚且つそこに巻き込まれずに、働きかけていくこと」は、「臨床心理士が最も得意として楽しめる」ことであると述べていることである。産業組織への働きかけの基礎に、臨床心理士の大切にしているもの、最も得意とするものがあると述べているが、それを筆者はこれまでの考察から、『自身の実感にもとづき体験に向き合いながら、相手の価値観を尊重しつつ、対話の中で関係を作り上げていく態度や技法』と考えている。

2 事例Bのレポートの結果と考察

(1) B—1 の結果

今回の授業を通して学んだこととして、まず、自分の実感を大切にすることが挙げられる。今まで自分の実感に関しては、講義の中や面接で注目する時に考えるようなものだった。しかし、今回の授業で最初に興味深く思ったのは、本や新聞、論文なども、実感に落とし込んで読んでいくことだった。社会的なメッセージやキャンペーンは、概念として捉えると簡単に理解してしまい、気付かないうちに流されてしまうことが多い。しかし、改めて自分の実感から捉えなおしてみると、ズレを感じたり、理解できなかったりすることがある。そのズレを感じられることが、キャンペーンに流されず、客観的に距離を置いて社会的文脈

を多面的に捉えるきっかけになる。そうすることで、個人が何に囚われているのか、他の選択肢や可能性、可塑性はないのか問い直し、自分の価値観も含め、事態を相対化していくことが可能になる。また、法律や制度、新しい概念なども、自分たちの現実生きる手立てとして血肉化していくことができる。それは、主体的で柔軟な生き方につながるのだと感じた。

(2) B-1 の考察

産業心理臨床では、社会的なメッセージやキャンペーンなどどのように関わるのかが他分野よりも重視される。社会的なメッセージやキャンペーンなどを頭で分かったつもりになり、その結果としてそれに巻き込まれ、安易に流されてしまうことも多い。本、新聞、論文なども、自分の実感で読み直し、自分の体験に落とし込んで感じ直してみると、そこにズレや分らなさを感じたりする。そのズレや分らなさ、それに距離を置いて、その社会的文脈を多面的に捉えるきっかけになる。またそのズレや分らなさ、丁寧につきあっていくならば、自分のこだわりが見えてきたり、それを相対化していく可能性も生じてくる。自分の実感で感じ直してやることによって、法律や制度、新しい概念なども、自分の現実生きる手立てとして血肉化していくことが可能となってくる。

(3) B-2 の結果

そしてまた、実感を語ること、相手の語りを聴くことの重要性も体験できた。実際に自分が3日間の間、実際に体験した言葉で表現することが難しいような気持ちを何度も語るうちに、自分の価値観が相対化され、新しい自分の選択肢や生き方が広がったような感覚を持つことがあった。そのように何度も語ることや、それを丁寧に聞いてくれる人がいることで、自分の体験が変化し、今までにない新しい可能性を感じることができると知った。また、相手が何を大切にしているのか、どんな生き方をしているのか、相手のニーズを捉え、自分のやりたいこととすり合わせていくことも、語りの中から可能になるのだと思った。お互いの実感とその違いを尊重しながらどう折り合いをつけていくか、自由に語りなおしていける関係性の中で対話することが、体験の変化や新しい可能性の発見につながるのだと思った。また、こうした1対1の面接がどんな場面でも基本にあり、企業という大きな集団の中に入って違う視点に立つ人間として対話していく場合でも、同じことが基本なのだと理解した。そうした試行錯誤は、自分にとっても相手にとっても、新しいものを生み出す面白さややりがいと一緒に感じていくことのできる作業ではないかと思った。

(4) B-2 の考察

簡単に表現できる気持ちよりも、なかなか表現することが難しいような気持ちの方が、それをていねいに聞いてくれる人がいる場合ならば、何度も語るうちに、変化していくことが多い。Bさんは、その変化を、「自分の体験が変化し、今までにない新しい可能性を感じることができると」実感している。また相手の語りを聴きながら、実感にもとづき「相手が何を大切にしているのか、どんな生き方をしているのか、相手のニーズを捉え」という相手のアセスメントも行われる。「お互いの実感とその違いを尊重しながら」アセスメントし、どう折り合いをつけていくかを、「自由に語りなおしていける関係性の中で」、自分と相手の微妙な立場や気持ちなどの「体験の変化や新しい可能性の発見」の中で、手探りですりあわせ

ていくのである。Bさんは、相手と「自分のやりたいこととすり合わせていくことも、語りの中から可能になるのだ」とも感じている。

このような気づきは、まさに対話の、そして「1対1の面接」が持つ力への認識といえるが、大事なことは、Bさんが、この認識を、単に知的なレベルで学習したのではなく、グループでの話し合いの中で、体験的に体得できたことにある。そして、「こうした1対1の面接がどんな場面でも基本にあ」と認識し、それは今後「企業という大きな集団の中に入って」自分が臨床心理士として「違う視点に立つ人間として対話していく場合でも、同じことが基本なのだと理解し」ている。そして「そうした試行錯誤は、自分にとっても相手にとっても、新しいものを生み出す面白さややりがいと一緒に感じていくことのできる作業ではないかと思った」と述べている。実際の企業において臨床心理士がコーディネーターとして取り組む多種多様な調整が、このように展開するか否かは難しい部分があるとしても、Bさんが『産業心理臨床においても通用する対話の基本』を実感できたことに、ここでは注目しておきたい。

(5) B-3の結果

以上のような、実感を大切にすることや、語ること語りを聴くことの大切さは日常の臨床活動でも同じであり、それは、面接以外の日常場面でも活用することができることである。実感も語りも個別的なものである。また、それは社会の様々な文脈によって影響されている。しかし、その文脈から距離をとり、多面的に捉えていくことで、実感にも語りにも様々な可能性や可塑性が生じてくる。そうした体験の変化は、生き方の変化へとつながり、より自由で柔軟な自己を実現することが可能になるのだと理解した。そして、どんな文脈においてもその視点を持っていること、その可能性や可塑性に気づけることが、臨床心理士の専門性なのだったと思った。自分の生き方も含めて、今回の授業でたくさんの可能性が開けたように感じた。また、臨床活動についても、少し面白さや楽しさを感じられるような気がしてきた。そうした自分の体験の変化や、視点の変化こそが、今回の授業での一番大きな収穫だったように思う。机上の理解に終始しない、気付いた次の瞬間から、自分の生き方が少し変わるような体験ができたと思う。

(6) B-3の考察

実感も語りも、それらがあくまでも個人的・個別的な世界であり、自分の身の回りのごく小さな狭い世界であることを忘れてはならない。また実感や語りを重視する時は、感覚を大切にするだけに、不安・自責などの内的で微妙な諸感情や、外的で多種多様な刺激に巻き込まれやすいことにも、注意が必要である。そのためには、内外の刺激に、間をとり、距離をとることで、その刺激の様々な文脈を多面的に理解していくことができるようになる。それにより、内外の文脈に支配されたり、巻き込まれたりすることによる常同的で貧弱な語りではなく、そこには「様々な可能性や可塑性が生じてくる」のである。Bさんは、「どんな文脈に」対しても、距離をとって実感し、多面的に理解するという視点を持って、そこに生じる「可能性や可塑性に気づけることが、臨床心理士の専門性なのだった」と述べている。また臨床心理士の専門性をこのように思えたことで、恐らくはハードルが高く感じられていたであろう産業領域における「臨床活動についても、少し面白さや楽しさを感じられる

ような気がしてきた。そうした自分の体験の変化や、視点の変化こそが、今回の授業での一番大きな収穫だったように思う」とまとめている。

最後の「机上の理解に終始しない、気付いた次の瞬間から、自分の生き方が少し変わるような体験ができたと思う」という感想は、講義形式ではなくグループ経験を目指した今回の授業運営の効果の一端を物語っていると思われる。

IV 研究の総合考察

1 実感にもとづき自分の体験を基礎とする姿勢

自分自身が直接に経験する世界、つまり自分自身の実感にもとづく直接の「体験」を基礎とする姿勢がある。そこでは、論文の内容やグループの会話の内容も重要であるが、それを実感にもとづきいかに豊かに体験しているのか、つまり『体験の様式』がさらに重視される。今ここでの実感にもとづいてお互いが生き生きと対話することにより、それぞれの体験が少しずつ変化していくのである。

しかしここで注目しておきたいことは、事例の2人が、単に講義を聞くことでの知的理解によってこの実感と体験の認識を得たのではなく、自ら語り、仲間の語りを聴き、共に感じ、考えるというグループ体験を通じて体得し始めたということである。例えば、すでに考察したが、論文を単に知識として読むことと、実感にもとづきながら自分の体験に落とし込んで熟読・味読することとの、体験の深まりと拡がりの差を感じ始めている。

また仮に「狭くて偏った」視点であっても、自分の体験としてその視点を認め、まずはそこから考え、対話を始めることが、筆者は自分の実感にもとづく方法と考えている。そしてそのような語りを続けた時に、それまで自分を縛っていた枠組みが見えてきて、自分が楽になることを体験する。ただし、付言しておくならば、その過程で気づいた洞察を「唯一の自分の真実」と思うことは、その時・その場においてはまさに真実なのではあるが、体験の世界は常に変化し続けるものであり、その時・その場の真実もまた意味深く変化していくことが多い。

これまでの大学教育の中で、院生達は自分の見方、考え方の偏りに注意し、それを排除するように教育されてきている。それは時に過剰に院生の中に取り入れられ、「主観的な見方、考え方は間違っている」、「客観的な見方、考え方をしなければならない」「自分の見方、考え方は主観的で間違っているかもしれない、どこかに正しい客観的な答えがあるはずだ」等の思考となって、結果として院生の実感にもとづく体験を抑圧してしまう。院生の中にこのように無自覚に取り入れられた抑圧から、院生自身の実感にもとづく体験の独自性を解放し、それを意識化していく。そしてその意識化ができた上で次のステップとして、もう一度認知のバイアスに注意を向けるプロセスが、臨床心理士の養成教育には必要であると筆者は考えている。

一方で、実感にもとづく体験を基礎とする態度は、感覚を大切にするだけに、いらだち・不安・落ち込みなどの内的な諸感情や、外的で多様な刺激に引き起こされた諸感情に巻き込まれ、ひきずられやすいことに対して、注意が必要である。一般にあまり実感や内面を重視

しない傾向があることの背景には、このような感情に巻き込まれる、感情にひきずられることを避けるためという理由も一部にあるのかもしれない。実感にもとづく体験を基礎とする態度は、感情との関わりが豊かになる半面、その感情のコントロールが少しだけ難しくなることが難点であるといえようか。これらの感情のコントロールのためには、内と外の刺激に、間をとり、距離をとることを学ぶ必要である。この間をとる、距離をとることは、実感に上手に触れていくために、必要とされる大切な技法である。

また実感にもとづく体験は、あくまでも個人的・個別的な世界であり、世界の広大さに比べれば、自分の身の回りのごく小さな狭い世界であることを忘れてはならない。この小さな狭い世界が、時には、自己愛的で自閉的な世界になってしまう危険性がある。実感にもとづく体験を重視する時には、このような袋小路に陥らないように注意することが必要である。

つまり実感にもとづく体験を基礎とする一方で、そのような姿勢そのものを対象化して、複眼的に理解することが必要とされるのである。比喩的に言うならば、この体験を重視する姿勢自体の光と影の両面を検討することである。

影が肥大化しすぎないための方法は、常に自分を対象化し続けることである。例えば、産業心理臨床の現場で、自分が臨床心理士として他職種から社員からどう見られているのかを常に意識することである。他職種、社員からの評判・評価、噂話、何気ない立ち話の中に含まれている臨床心理士への自分へのフィードバックに敏感になることである。また鳥観図的に、自分の振る舞い・立ち位置と自身が置かれた構造・状況を、空間的・時間的に大局的な視点から頻繁に眺めることである。このように実感にもとづく体験に基礎を置きながらも、鳥観図的視点との間を頻繁に行ったり来たり往復するのである。その往復運動により、自分と自分が置かれた空間的・時間的構造を意識化し、自分と自分を取り巻く世界全体のバランスを図っていくのである。

実感にもとづく体験の自閉化と自己愛化を防ぐもう一つの方法は、この授業の体験学習でも行われているが、自分とは異質な視点を持つ他者との対話である。しかし自分にとって盲点であり意味のある視点ほど、受け入れ難い違和感を感じる人が多いが、この違和感がある実感とどのようにつき合っていくのかがまさにポイントといえる。受け入れ難い、あるいは拒絶感を感じていることを否認しがちであるが、まずはそれを認めて、それに十分な距離を置きながらも、何とかそれと共にいてみることから始める。不協和音の違和感を感じていることは、変化にとって意味のある葛藤を体験していることであると自覚して、その人との対話を、十分な車間距離をとりながら、少しずつゆっくりと、しかしいねいに大切に進めることである。

基本的には、体験は、環境に対して開かれていて、いつも環境との相互作用を行い、状況・環境等の社会的文脈に対して開かれているのである。しかしそのことを『体験的に明らかに自覚・体得すること』が大切である。それによって、ともすれば体験が狭い世界に偏ってしまうことを避けることができるのである。

2 産業心理臨床へのハードルの高さ、企業組織への関わりへの負担感が減少

個人心理療法・相談室中心のカリキュラム編成の影響もあり、外向的よりは内向的性格が

多い臨床心理士養成課程の院生は、相談室中心の心理臨床に比べて、企業組織への関わりが大きい産業心理臨床に、なじみにくい、違和感を伴うハードルの高さを感じていると思われる。さらに産業心理臨床だけではなく教育心理臨床においても、企業組織や学校組織への関わりの必要性を知的には知っているとすれば、組織への関わりをともすれば負担感の伴う重い義務と感じていたり、越えなければならない高い壁と思っているなどということが生じているかもしれない。

このようなことがありうる受講生達にとって、今回の二事例に典型的に表れている様々な記述を分析すると、そのような産業心理臨床へのハードルの高さが少し減じていると判断して良いであろうと思われる。例えばそれは、A-1の「今回、産業心理に対するイメージが大きく変化した」の記述に現われている。

またこの授業で体感できた臨床心理士の基本姿勢や態度が、あたかも異質の世界のように感じられていた産業心理臨床においても通用しそうであるという認識が、企業組織への関わりの負担感や産業心理臨床のハードルの高さを減らしていると思われる。列举すれば、A-4の「自分が、自分自身の心や体験と真摯に向き合い続ける姿勢や態度が、産業領域において幅広く多様な背景を持つ、対象者及び対象組織との真の信頼関係を築くためにも欠かせないと思う」、A-6の「そのような難しい領域だからこそ、臨床心理士が大切にしているものを核として持ち続けながらも、その組織や個人を尊重し大切にし、尚且つそこに巻き込まれずに、働きかけていくことが求められ、それは、臨床心理士が最も得意として楽しめる分野でもあると思う」、B-2「こうした1対1の面接がどんな場面でも基本にあり、企業という大きな集団の中に入って違う視点に立つ人間として対話していく場合でも、同じことが基本なのだと理解した。そうした試行錯誤は、自分にとっても相手にとっても、新しいものを生み出す面白さややりがいを一緒に感じていくことのできる作業ではないかと思った」、B-3「そして、どんな文脈においてもその視点を持っていること、その可能性や可塑性に気づけることが、臨床心理士の専門性なのだったと思った。また、臨床活動についても、少し面白さや楽しさを感じられるような気がしてきた」等の記述に表わされている。

さらにつけ加えておけば、上記の記述の中に、このような見通しに従って実践することを、「面白く感じたり、楽しめそうだ」という記述が見受けられる。実際の産業現場の中で、本当にどこまで楽しめそうであるかは置いておくとしても、これらの表現は、この認識が、単に知的レベルのものではなく、もう少し実感によって体得したものであることを示している。筆者は、体験学習においては、参加者が、楽しんだり、面白く感じたりする遊びの要素が、非常に重要であると認識している。

産業領域も他領域も、臨床心理学として共に同じ部分と、産業領域として独自に特別なものを必要とするところがある。これまではその必要上から産業心理臨床の特別なところを強調してきたが、受講生の授業開始時の認知にも見られるように、それが産業心理臨床参入への敷居を高くしてきた側面もあるかもしれない。とすれば、臨床心理学の原点、臨床心理士の基本姿勢は同じという部分も再提示しながら、院生の産業心理臨床参入への敷居を低くすることも今後は必要であろうか。

3 本研究の限界と今後の課題

この授業の受講者 11 名の中からこの授業の意義を典型的に表していると思われるレポート 2 事例を抽出し、それを分析・考察することで、授業の意義の一端を明らかにできたと思われる。しかし、典型例とはいえ、分析・考察したのは 2 事例である。典型的な意義の一端を明らかにしたとはいえ、データの少なさはこの研究の限界である。今後、残り 9 名のデータを加えることで、意義の他側面や、意義のモデル図を作成することなども可能になると思われる。

今回の授業の結果は、集中講義という構造に助けられている要因が大きいと思われる。特に体験学習の側面は、集中的グループ経験のような集中という形式が効果を及ぼしたかもしれない。通常の形式による講義において、このような結果を得ることは、なかなか困難かもしれないことは指摘しておきたい。

また授業研究として実施している限りやむを得ないことではあるが、受講生のレポートを含めて授業内での院生の言動のすべてに、成績評価のプレッシャーが加わっているため、受講生には意識的、無意識的にもより良く表現しようとする動機が働いていたと思われる。このような授業研究に伴う課題ではあるが、さらに検討を重ねていきたい。

質の高い臨床心理士養成を考える時、実践的授業研究は必須といえる。今回の研究は、方法的にはラフなものではあるが、その第一歩と考えておきたい。

【引用文献】

- C. ダグラス・ラミス (2004) 『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』 平凡社
廣川 進 (2010) 「職場のメンタルヘルス、最近の傾向と対策」『人事実務』、1074, 4-11
廣川 進 (2010) 「リーマン・ショック後のリストラ失業の語りを聴く」『日本労働研究雑誌』、598, 48-57
市川佳居 (2001) 「企業内における従業員援助プログラム」 宮田敬一編 (2001) 『産業臨床におけるグループセラピー』 金剛出版
中谷 巖 (2008) 『資本主義はなぜ自壊したのか』 集英社インターナショナル
新田泰生 (1999) 「教育研修を中心とした企業相談室の開設とその後の運営」『産業カウンセリング研究』 3 (1), 1-7
新田泰生 (2002) 「産業領域における活動モデル」 下山晴彦・他 (編) 『講座臨床心理学 6 社会臨床心理学』 東京大学出版会
新田泰生 (2008) 「臨床心理士の産業領域における臨床心理実践について」『桜美林論集』 35, 105-113
新田泰生 (2010) 「産業臨床心理学における物語論の視点から見たワークライフバランス」『神奈川大学心理相談センター紀要 心理相談研究』 1, 5-16
平 陽一 (2005) 「企業サイドからみた臨床心理学および組織心理学への要請課題」 日本臨床心理士会 第一回産業心理臨床メンタルヘルスケア研究会
辻 信一 (2004) 『スロー・快樂主義宣言』 集英社
渡辺 峻 (2009) 『ワーク・ライフ・バランスの経営学』 中央経済社
Z. V. シーガル (2002) 『マインドフルネス認知療法』 北大路書房

【参考文献】

- 馬場洋介（2010）「クライアント支援における企業内カウンセラーの個人と組織への関わりプロセス——役割変化と姿勢・スキルに着目して——」『神奈川大学心理相談センター紀要』、1, 51-65
- CPI 研究会：島田修・中尾忍・森下高治編（2006）『産業心理臨床入門』
- 市川佳居（2004）「EAP（従業員支援プログラム）」『臨床心理学——職場における臨床心理——』19, 41-46 金剛出版
- 乾吉佑（2004）「サイコセラピストの産業精神保健への参加：心理臨床家の場合」『精神療法』30（5）, 27-33
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂
- 木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 松原達哉・楡木満生・澤田富雄・宮城まり子（2005）『心のケアのためのカウンセリング大事典』培風館
- 森崎美奈子（2006）「臨床心理士の役割と取り組み」『産業ストレス研究』13, 231-235
- 楡木満生（2003）『実践入門 産業カウンセリング——現場で生かすカウンセリング・マインド』川島書店
- 新田泰生（1996）「組織との物語作りからみた個人と組織の関係」『人間性心理学研究』14（2）, 144-151
- 新田泰生（1997）「組織のメンタルヘルスへのコミュニティ・アプローチ」『人間性心理学研究』15（1）, 16-23
- 大沢真知子（2006）『ワークライフバランス社会へ』岩波書店
- 島悟（編）（2001）『現代のエスプリ 変貌する職場のメンタルヘルス』402、至文堂
- 田尾雅夫（1991）『組織の心理学』有斐閣
- 渡辺三枝子（2007）『新版 キャリアの心理学』ナカニシヤ出版
- 渡辺 忠（1996）「これからの産業社会における個人と組織の関係について」『人間性心理学研究』14, 135-143
- 渡邊忠・渡辺三枝子・安藤一重（編）（2002）『現代のエスプリ別冊 新しい産業カウンセリングの展開シリーズⅡ 産業カウンセリングの実践的な展開』、至文堂
- やまだようこ（編）（2007）『質的心理学の方法——語りをきく——』新曜社